はじめに

「津波で何もかも失ったのに、アチェの人たちはなぜみんな笑顔なんですか。」

これは、スマトラ島沖地震・津波（インド洋津波）で村によっては住民の約九割が亡くなったインドネシアのアチェ州で、災害直後に現地入りして報道や人道支援に従事した人たちからしばしば尋ねられた問いである。

二〇〇四年一二月二六日、スマトラ島北部の西海岸沖でマグニチュード九・一の大地震が発生し、それに伴う巨大津波がインド洋沿岸の地域を襲った。海辺のリゾート地に滞在していた欧米や日本の観光客も被災し、津波の映像がテレビ・ニュースで繰り返し配信されたこともあって、世界中の高い関心を集め、国連が「史上最大の支援作戦」と銘打った大規模な救援復興活動が開始された。

被害の範囲はインド洋沿岸の一四か国におよび、死者・行方不明者は二二万人に上った。国別に見て被害が最も大きかったのはインドネシアだった。スマトラ島の北西端にあって震源に最も近かったアチェ州は、海岸部に社会的インフラの多くが集中していたこともあって大きな被害を受け、死者・行方不明者は約一七万三千人、避難民は約四四万人に達した（インドネシア国家災害情報データベース調べ）。アチェ州の面積は約五万八〇〇〇平方キロメートルで、被災前の人口は約四二〇万人だった。日本の東北六県とほぼ同じ広がりを持つ土地に東北六県のほぼ半分の人口が住んでおり、東日本大震災の犠牲者数の九倍近い人々が犠牲になったと言えば、想像を絶する規模の被害がいくらかでも想像できるだろうか。

津波被災後または紛争下のアチェにて撮影

図１　バンダアチェの被害の様子。海岸から４km の地点にある市中心部の大モスクがみえる（2005年２月）

アチェ州[*1]の内陸部は山脈が走り、人々は主に沿岸部で農業や漁業や商業に従事していたため、長い海岸線に沿って被害が出た。特に大きな被害が出たのはインド洋側の西海岸と、スマトラ島北端で政治・経済・文化の中心であり人口も集中していた州都バンダアチェ市周辺部だった。バンダアチェ市は、市街地の三分の一が全壊、三分の一が浸水する被害を受け、人口の五分の一を失い、州政府は機能不全に陥った（図1）。

マラッカ海峡に面する北海岸側では、他地域に比べて被害の規模は軽微だったが、スマトラ島をまわりこんできた津波の被害を受け、住宅が壊れたり漁船が流されたり水田が塩水をかぶったりするなどの被害を受けた。

これほど大きな被害を受けたアチェは世界中の関心を集め、報道や人道支援の専門家がいち早く現地入りした。そして、現地の惨状を目の当たりにした人たちに強く印象に残ったのが被災したアチェの人々の笑顔だった。アジア各地で人々の生きざまを撮り続けているある日本人カメラマンは、被災者の打ちひしがれた様子を撮影するつもりでバンダアチェに赴いたところ「思いのほか明るい表情に驚いた」とテレビ局の取材に答えてい

図2　「津波縁日」の様子（2005年12月）

る。[*2] 紛争地での長い調査経験を有するある研究者は、津波後のアチェの人々の表情について「多くの紛争地の犠牲者の表情と異なっている。自然災害の被災地の人々の表情は明るい」とコメントした。[*3] また、津波で妻や夫を亡くしたアチェの人々が避難民キャンプで生活している間に次々と再婚したことも人々を驚かせた。

アチェの人々の様子に対する違和感は、その後の復興過程でも繰り返し語られた。津波から一年目を迎えた二〇〇五年一二月二六日には、海岸近くにあって津波の直撃を受けたが倒壊を免れたモスクがお化粧直しで白く塗り直され、そのまわりに「津波縁日」が立った。被害の様子を描いたTシャツやカレンダーを売る屋台が出て、訪れた人々は友達と相談しながらどの絵柄にしようか悩んでいた（図2）。縁日の一画には人々が津波に飲み込まれている阿鼻叫喚が描かれた大きな

*1　アチェ州の名称はアチェ特別州（Daerah Istimewa Aceh、一九五九～二〇〇一年）、ナングロ・アチェ・ダルサラーム州（Nanggroe Aceh Darussalam、二〇〇一～二〇〇九年）、アチェ州（二〇〇九年～現在）と移り変わってきたが、本書では時期にかかわらずアチェ州とする。

*2　「津波一年　子供たちは今～大石芳野　被災地を撮る～」（NHK「クローズアップ現代」二〇〇六年一月一七日放送）。

*3　二〇〇八年四月から七月まで開講された東京大学東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブによるテーマ講義「アジアの自然災害と人間の付き合い方」（担当教員：小河正基・加藤照之）の中で、第一一回目の講義「災害とジェンダー問題」を担当した中西久枝氏による。

図3　遺体を運ぶトラック（2005年2月）

絵が掲げられ、その前で記念写真を撮らせるサービスも見られた。[*4] 津波からわずか一年しか経っておらず、仮設住宅で寝泊りしている人がまだ何万人もいる状態で、アチェの人々がまるで津波が他人事であったかのように明るい姿を見せていた。

この印象は、二〇〇六年五月に同じインドネシアでジャワ地震が発生し、ジャワの被災者と比べられたことでいっそう強められた。支援団体による住宅再建事業に対し、ジャワの人々は自分たちも相互扶助によって労働を提供し、支援者に感謝の意を忘れないのに対し、アチェの被災者たちは人を雇い、しかも支援者に注文をつけるといった具合である。国連ハビタットがアチェで製作した映画『象の間で戯れる』[*5]（Playing between Elephants）でも、支援団体の意向どおりに動かないばかりか、支援団体にさまざまな注文をつけ、時に支援団体の足元を見透かしたような交渉を行うアチェの人々とそれへの対応に苦労する支援団体の様子が描かれている。

ただし、津波から生き残ったアチェの人々が未曾有の災厄をすっかり忘れて新しい人生を歩んでいたわけではない。それは、たとえば、アチェ州の村々の墓地で遺体の再埋葬が行われたことにうかがえる。

津波直後の緊急対応の時期、津波で街じゅうに押し寄せた瓦礫を取り除き、瓦礫に埋もれていた遺体を回収して埋葬することが急務だった。数万体の遺体の身元を一人一人確認して埋葬している余裕はなく、遺体の多くはビニールシートに簡単に包まれ、トラックに積まれて市内一〇か所の埋葬地に運ばれ、広場に掘られた大きな穴に乱雑に埋められていった。被災直後の混乱の中、熱帯で遺体の腐敗が進む状況では、正式な埋葬とは言えないような埋葬の仕方であっても、それが残された人々に精一杯できる弔い方だった[*6]（図3）。

復興がやや落ち着いてきた頃、被災直後に運よく家族や親戚の遺体を見つけることができ、しかし正式に埋葬する余裕がなかったために集団埋葬地や近くの空き地に仮埋葬せざるを得なかった人たちが、遺体を掘り起こし、自分たちの村の墓地に正式に埋葬する姿がしばしば見られた。津波から二年が過ぎた頃から、アチェ州の各地で村の墓地に二〇〇四年一二月二六日没と刻まれた新しい墓碑がたくさん立つようになった。二年以上も経ってから遺体を掘り起こし、自分の村の墓地まで運んで再埋葬する姿に、亡くなった人たちを弔おうとするアチェの人々の執念が感じられた。

被災直後に見せた笑顔と、被災から二年も経ってから遺体を掘り返し再埋葬する執念。この二つはどうすればうまく結びつくのか。その裏には、アチェの人々の静かだが力強い思いがある。そのことを改めて感じたのは、津波から七周年を迎えた二〇一一年一二月二六日、バンダアチェ市の郊外で行われた津波七周年記念式典でのことだった。式典で演説したアチェ州知事のイルワンディは、会場に集まっていたアチェの人々に対し、私たちはかつて互いに銃を向け合った罪を背負っており、七年前の大災害を契機に新しい社会を作るに至ったが、自分たちが過去に犯した過ちを決して忘れることなくこれからの暮らしを営んでいこうと呼びかけた。そして、同じ年に発生した東日本大震災に触れ、私たちがアチェの経験を世界にきちんと伝えることができていたなら、もしかしたら日本の人たちの犠牲者を減らすことができたかもしれず、自分たちの経験をうまく発信できていないことが悔やまれると語った。これは、未曾有の大災害に襲われたアチェの人々が、世界中から関心と支援を受けて復興の道を歩んでこられたことに深く感謝するとともに、大災害を経験した自分たちがこれ

*4 「津波縁日」については第4章を参照。
*5 アルヨ・ダヌシリ監督、二〇〇七年製作。日本では二〇〇七年山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映された。詳しくは本シリーズ第一巻第7章参照。
*6 集団埋葬地と再埋葬については第5章を参照。

からどのように生きていくのかを世界に示すことが、津波で亡くなった人たちに対しても関心と支援を寄せてくれた世界の人たちに対しても報いることになるという強い思いだった。

州知事が「アチェの人々はかつてお互いに銃を向け合った罪を背負っている」と語ったのは、インドネシアからのアチェの分離独立を掲げる自由アチェ運動（GAM）[*7]とインドネシア政府の間で三〇年にわたって武力紛争が続いており、政府側と独立派ゲリラだけでなく一般市民にも多くの死傷者が出ていたことを指している。[*8]二〇〇三年には緊張が最高潮に達し、インドネシア政府はアチェに非常事態を宣言して独立派ゲリラ掃討のための軍事作戦を展開し、外国人は報道や人道支援の関係者であってもアチェ入域が厳しく制限された。人の出入りができなくなっただけでなく情報も閉ざされたため、外部社会からアチェで何が起こっているかをほとんど知ることができなくなり、アチェの人々は世界から閉ざされた状態で紛争状態のもとで暮らすことを余儀なくされた（図4）。

図4　紛争を避け避難する人々（1999年8月、大アチェ県）

津波から八か月後の二〇〇五年八月、GAMとインドネシア政府の間で和平合意が成立し、三〇年に及ぶ武力紛争が終結した。二〇〇六年一二月には元GAMメンバーも参加して州知事選挙が行われ、津波前に元GAMメンバーとして逮捕・投獄された経験があるイルワンディが州知事に就任した。[*9]

このように、アチェの人々は世界から隔絶された状態で互いに銃を向け合う紛争を経験し、その最中に大津波による被害を受けた。津波で多くの人が亡くなり、見慣れていた景観は一変したが、世界中の関心を集め、

津波による甚大な被害から立ち直るための支援を得た。そして、長年続いた紛争に終止符を打ち、世界の人々に支えられながら災害と紛争からの二重の復興の道のりを歩み始めた。アチェの津波被災と復興を理解するためには、三〇年に及ぶ紛争を含め、アチェが自身を取り巻く世界にどのように位置づけられてきたかを、少し歴史をさかのぼって理解する必要がある。

アチェへ向けられるまなざし

アチェは、東南アジアの南端に広がる群島国家インドネシアの一地域である。インドネシアの首都ジャカルタから飛行機で四時間。東南アジアの西の玄関口であるマラッカ海峡に面したスマトラ島の北西端に位置する。かつてこの地にはアチェ王国と呼ばれる海洋交易国家があり、金やコショウを産出する広大なスマトラ島を後背地に、インド洋世界と東南アジア世界を結ぶ東西交易の拠点として繁栄した。[*10] 東南アジアのイスラム教徒にとってはメッカ巡礼への船出の地であり、また、メッカ帰りのイスラム知識人が集う場所でもあったことから、東南アジアにおけるイスラム学の中心地と目され、スランビ・メッカ（メッカのベランダ）と呼ばれた。[*11]

---

*7 組織名は英語ではスマトラ・アチェ民族解放戦線（Aceh/Sumatra National Liberation Front）。一九七六年一二月四日、現在のアチェ州ピディ県で、アチェ王国の主権を継承する国家としてアチェ・スマトラ国の独立が宣言され、ハサン・ティロを最高指導者とする独自の内閣が組織された。当時のアチェでは天然ガス開発が始まっており、「アチェが独立すればブルネイのようになれる」と訴えた。ハサン・ティロは、国際社会の支持を得る上で妨げになるとしてイスラム主義を前面に出すことを避け、民族自決原則による独立闘争を行った。

*8 紛争中の弔いに関しては第5章を参照。

*9 和平合意に関しては第2章、和平合意以降の州自治に関しては第7章を参照。

*10 アチェ王国については［Lombard 2006(1967)］［Lee 1995］、インド洋海域世界の交易史については［家島 2006］ならびに「インド洋海域世界――人とモノの移動」を特集した『自然と文化そしてことば』第4号（胡蘆舎、二〇〇八年）を、東南アジアの港市国家については［弘末 2004］を参照。

インドネシアは「多様性の中の統一」を国家標語に掲げた多民族国家だ。この領域は、もともと複数の王国に分かれて統治されていたが、オランダの植民地統治、アジア太平洋戦争時の日本による占領、そして四年半にわたる独立戦争を経て、一九五〇年にインドネシア共和国として独立した。[*12] 二億人を超える住民は、母語で分類すれば三〇〇を超える民族から構成される。多様な人々を繋いでいるのは、海洋交易ネットワークを通じて民族を越えた共通語として発展してきたマレー語をもとにつくられた国語のインドネシア語である。母語も宗教も生活習慣も異なる人々が、一つの祖国、一つの国語を共有し、インドネシア国民として国家を運営する国、それがインドネシアである。石油や天然ガスといった一次産品に恵まれたインドネシアは、一九六八年に大統領に就任したスハルトの指導下で、インドネシア国軍による治安維持と外国資本の積極的な導入に支えられた開発政策を両輪とする開発主義体制をとり、国家の統一と発展をめざしてきた。[*13]

大学院でインドネシアの現代史を学んでいた筆者がアチェへの訪問を思い立ったのは、権威主義的なスハルト体制の将来に人々が危惧を抱き始めた一九九四年のことだった。当時、日本にいて同時期のアチェについて得られる情報は限られていた。アチェでは一九七〇年代半ばにGAMによりインドネシアからの分離独立を求める運動が始められていたが、国家の統一と治安の維持を最優先させるスハルト政権によってたちまち鎮圧され、運動の指導者は海外に亡命していた。アチェの様子については、一九八〇年代末にGAMの武装闘争が活発化したことを受けてインドネシア国軍がアチェで軍事作戦を実施していること、その際、国軍兵士が住民に人権侵害を行っていることなどが、人権団体などによってときおり伝えられる程度だった。

インドネシア研究では、アチェ人は権力に立ち向かい戦う人々として知られていた。アチェ王国の植民地化をはかるオランダに抵抗したアチェ戦争（一八七三〜一九一二年）はオランダ本国を疲弊させ、オランダの植民地統治政策に大きな転換を迫った。[*14] インドネシア独立戦争（一九四五〜一九四九年）では、インドネシアの他の地域が次々とオランダの勢力圏に取り込まれるなか、アチェは最後までインドネシア共和国を支持して戦い続

け、一九四九年のインドネシア独立を導いた。[*15] その延長から、GAMの運動も、抑圧的なスハルト体制に対するアチェの人々の勇猛果敢な抵抗として理解が試みられていた。

一方、ジャカルタのインドネシア人の多くは、それと異なるアチェ人像をもっていた。ジャカルタでアチェ訪問を準備する私に対し、ジャカルタの友人たちは「アチェ人はファナティック（狂信的）だから気をつけろ」と助言した。インドネシア建国直後、アチェではイスラム共和国建設を掲げてインドネシア共和国政府に反旗を翻したダルル・イスラム運動[*16]（一九五三〜一九六二年）が起こった。インドネシアへの「反乱」はダルル・イスラム運動とGAMで二度目で、アチェ人はよそ者に対して排他的で好戦的な人々だという。しかもアチェ人の抵抗運動はイスラム教指導者が指導しており、イスラム教への強い信仰心に支えられた運動には交渉の余地がない。「多様性の中の統一」を掲げ、特定の宗教の重用や特定の宗教実践の規範化を避けることで民族共存をはかってきたインドネシアの人々にとって、アチェ人は頑なで融通がきかない厄介な人々だった。まして国軍の軍事作戦が実施されている「あぶない土地」にわざわざ行くことはないというのがジャカルタの人々の考

---

*11 第7章・第8章を参照。

*12 インドネシア独立の過程やインドネシア独立を支えたインドネシア民族主義については［永積 1980］［土屋 1988］を参照。

*13 開発体制期のインドネシアについては［白石 1996］を参照。

*14 ゲリラ戦争を含めればアチェ戦争は一九一四年まで続き、一八七三年四月から一九一四年までの間、戦闘による犠牲者数は、アチェ側七万人以上、オランダ側約三万七五〇〇人、負傷者は双方合わせて五〇万人とされる。特にオランダとの闘争を「聖戦」と位置づけたウラマー（イスラム教指導者）に率いられた反オランダ闘争は激しく、オランダは長くアチェ内陸部へ影響力を及ぼすことができなかった［Reid 1969］。

*15 アチェにおけるインドネシア独立戦争については［Ried 1974, 1979］が詳しい。

*16 イスラム教を建国理念とするイスラム国家の樹立をめざす武装闘争。一九四八年から一九六五年まで西ジャワ、南スラウェシなどインドネシア各地で見られた。アチェでは、インドネシア共和国独立闘争を率いたイスラム教指導者で、インドネシア独立後にはアチェ州知事を務めたダウド・ブルエがアチェの自治を求めてダルル・イスラム運動に参加した。

えだった。

初めて訪問したアチェ州の州都バンダアチェは、インドネシア独立を記念したモニュメントや英雄墓地、役所の配置等、インドネシアのほかの街と大差なく、一目でわかる他地域との違いを期待していた筆者を拍子抜けさせた。海も山も田も美しく、魚を始め食材も豊富で、どこに行くにも渋滞に苦しむジャカルタよりもよほど過ごしやすいと感じた。一頭数万円の価値がある牛の群れが誰に導かれることもなく車道わきを歩いている様子は、鶏泥棒が後を絶たないと聞くジャワと比べて治安もはるかに良いことをうかがわせた。軍の駐屯地の前を走る車は徐行しなければならないといった決まりごとや、スハルト大統領や国軍を批判することへの憚りはあったが、それらはインドネシアのどこでも見られたことだった。

「ファナティックなアチェ人」の姿も見当たらなかった。外国人である筆者はどこでも歓待され、日本人と知れるや見ず知らずの人々の訪問を受けた。「日本軍占領期に兵補[*17]だった父の体調が悪く生活が苦しいので援助してくれる財団を知らないか」「アチェのコーヒー[*18]を輸出したいから買い手を探してくれないか」「イスラム寄宿塾[*19]の再建に対する資金提供者を紹介してくれないか」等々。面食らう筆者に対し、彼らは再建計画書や兵補の証明書を携えて、その申し出が理にかなっており、場合によっては筆者にも利益（不利益）があると付け加えながら丁寧に説明するのだった。また、ジャカルタや日本の様子を尋ねられ、アチェを見てどう思ったか感想を求められたりした。

国軍による軍事作戦が行われている「あぶない土地」は、マラッカ海峡に面したピディ、北アチェ、東アチェの北部三県に限定されていた。[*20] これらの土地は、バンダアチェとスマトラ島随一の交易都市メダンとを結ぶ陸路沿いにあって、天然ガスを産出し、広大なアブラヤシ農園を擁する豊かな地域だった。バンダアチェからは車で三時間の距離にある。山一つ向こうのこれらの地域で何が起こっているかについてバンダアチェの人々は多くを語らなかった。かわりに「アチェはあぶなくない」と力説し、詳しく聞けば、「あぶない土地」

図5　紛争下で行方不明となった家族の「遺影」を掲げる人々とともに（1999年4月、ピディ県）

での事業は国軍との協力が不可欠なので域外からの投資が限定されるとこぼすのだった（図5）。

アチェの外からきた筆者は、アチェの人々にとって外の世界と結びつくための手掛かりだった。人々は外の世界が求めているものが何かを探り、自分たちが何を発信すれば外と繋がれるかを模索していた。

その後、筆者はアチェの近現代史を研究するため、一九九七年末から三年あまりを国立シアクアラ大学教育学部歴史学科の留学生としてバンダアチェで過ごすことになった。この間、一九九八年五月のインドネシア政変でスハルト大統領が退陣し、権威主義的なスハルト体制は崩壊した。インドネシア改革の盛り上がりと同時に、各地で住民どうしの武力衝突が頻発した。アチェではGAMが急速に勢力を拡大し、インドネシア治安当局との武力衝突やGAMの取締りを目的とする治安当局の作戦行動による犠牲者は毎月増加し、一九九九年七月にはひと月で一〇〇人を超えるにいたった。ユーゴスラビアの解体劇を想起させる

*17 アジア太平洋戦争中に日本軍が東南アジアの占領地域で組織した現地人補助兵。日本軍将兵の下で戦闘要員あるいは労働力として雇用された。

*18 アチェ州はインドネシア国内でも有数のコーヒー産地で、内陸部のガヨ高地で産出するコーヒーは日本ではガヨマウンテンなどのブランド名で知られる。本書第9章も参照。

*19 寄宿制のイスラム学校のことで、インドネシアでは一般にプサントレン（pesantren）と呼ばれるほか、アチェではダヤ（dayah）とも呼ばれる。

*20 現在のピディ県、ピディジャヤ県（二〇〇七年にピディ県から分立）、ビルン県（二〇〇〇年に北アチェ県から分立）、北アチェ県、東アチェ県、アチェタミアン県（二〇〇二年に東アチェ県から分立）の六県からなる地域。

状況に、国際社会はアチェに関心を向けるようになった。バンダアチェにいた筆者のもとにも同じ質問が繰り返し寄せられるようになった。「アチェは果たしてインドネシアから独立するのかしないのか。」

インドネシア内外のメディアがアチェに記者を派遣し、現地から報道を行った。警察機動隊の発砲を受けて丸腰の群集が逃げ惑い倒れる姿[*21]や、GAMとの関与を疑われたイスラム寄宿塾の塾生が軍の奇襲攻撃で皆殺しに遭い、集団埋葬された遺体が掘り起こされる映像[*22]が配信された。GAMと治安当局は積極的にメディアのインタビューに応じ、「住民の庇護者」を名乗って自らの存在や行動を正当化した。

こうしたなかで、アチェで匿名の暴力が増加した。「匿名」とは、事件は起こるが犯行声明は出されないということだ。治安当局は「GAMの犯行だ」と言い、GAMは「治安当局の自作自演だ」と主張するが、どちらが本当かはわからない。個々の事件の犯人が誰であるかにかかわらず、殺人を含む暴力行為が頻発し、GAMと国軍は互いに相手を非難し、攻撃の対象とした。アチェの治安は悪化し、人々は身の安全を守るために日常的に「治安当局側かGAM側か」の二択のあいだで自らの立場を定めていかなければならなくなった。

こうした状況から抜け出すため、GAMでも国軍でもない勢力がアチェの外から介入することが期待されたが、外の人々はアチェが紛争地となることで初めて関心を向けるというジレンマがあった。犠牲者の数が大きく、問題が深刻で悲惨なものとなることで、ようやくアチェの問題は大々的に報道される。しかし、アチェが紛争地であるかぎり、GAMとインドネシア治安当局という二つの軍事勢力の動向が真っ先に注目される。アチェの人々が外部勢力に話を聞いてもらうには、結局「独立か統合か」という問いに答えなければならなかった。

スハルト体制崩壊後、アチェは独立紛争の舞台として世界の注目を集めたが、それは同時に、外部世界との繋がり方が「GAMか国軍か」「独立か統合か」という枠組みに限定されることを意味していた。

インドネシア政府はそのようなアチェの問題に終止符を打つため、二〇〇三年五月にアチェに軍事戒厳令を

敷き、人道支援団体を含む外国勢力をアチェからすべて排除した上で、治安当局による州行政への関与を正当化した。その結果、アチェで生じていることは外部世界に見えなくなり、紛争地の名の下にアチェと外との繋がりは切り離された。

二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波が襲ったのはこのような状況下のアチェだった。この災厄が自然災害であり、政治社会問題と切り離して受け止められたこと、その被害のあまりの甚大さゆえに世界中が関心を向けたこと、インドネシア政府も独力で対応できないと早くから認めたことなどにより、さまざまな機関・団体や個人がアチェへの関わりを開始した。世界各地からたくさんの支援者が訪れ、ジャーナリストや研究者も報道や調査のためにアチェを訪れた。紛争地として閉ざされていたアチェは、被災地となることで一気に外部世界に開放された。

津波を契機にアチェ独立運動も大きな転換を迎えた。津波直後にインドネシア政府とGAMとの間で和平交渉が再開され、国際社会が見守る中、二〇〇五年八月の和平合意に結実した。独立派武装勢力の非武装化やアチェの自治権を定めるアチェ統治法が制定され、二〇〇六年一二月にはアチェで地方首長選挙が実施され、住民の直接選挙で選ばれた州知事のもと、和平合意にもとづく地方自治が始まった。

---

*21 「KKA（アチェ製紙）前交差点の悲劇」と呼ばれる。一九九九年五月三日に北アチェ県デワンタラ郡で治安当局が群衆に発砲して四六名が死亡した。

*22 一九九九年七月二三日に西アチェ県（当時、現ナガンラヤ県）ブトンアトゥのイスラム寄宿塾がインドネシア国軍の奇襲攻撃を受け、塾長・塾生ら五七名が犠牲となった。「ブトンアトゥの悲劇」と呼ばれ、［Aman 2001］のように、ジャカルタ在住のアチェ人有識者が治安当局を批判する書籍を刊行するなどの動きを促した。

本書のねらいと災害対応研究小史

本書は、二〇〇四年一二月二六日に発生したスマトラ島沖地震・津波で甚大な被害を受けたインドネシア共和国のアチェ州を対象に、災害を契機に社会がどのように変革を経験し、復興を経験しているかを地域研究の立場から明らかにするものである。

本書が答えようとするのは冒頭で挙げた問いに集約されるが、これをもう少し細かく分けてみると、たとえばアチェの津波災害と復興に関する以下のような問いになる。

「アチェの沿岸部に住む人々は津波の危険性について知らなかったのか」
「インドネシア国軍はなぜ外国による支援活動を妨害しようとしたのか」
「日本のNGOの緊急・復興支援はアチェにとって本当に意味があったのか」
「被災者たちが外国からの支援者を楽しそうに迎えていたのはなぜか」
「津波の犠牲者はどのように埋葬され、どのように弔われたのか」
「支援団体が建てた復興住宅に空き家が多く見られたのはなぜか」
「インドネシアの他の地域の人はアチェの被災をどのように受け止めたのか」
「外国にいる私たちはアチェの経験をどのように知ることができるのか」
「津波と復興を経てアチェの人々や社会はどのように変わったのか」

本書の議論は、主に筆者が津波発生後にアチェで現地調査を行って見聞きしたことをもとに、政府や国際機関・NGOの情報や、新聞・雑誌等の記事などとともに組み立てたものである。ただし、現地調査やその他の情報を解釈するにあたっては、筆者が津波の前から行っていたアチェの現代史に関する研究と、紛争下のアチェに長期滞在して女性や学生を含む社会のさまざまな層が紛争状況にどのように向き合おうとしてきたかについて聞き取り調査をするなかで得た知見や経験がもとになっている。また、本書は、以下に見るように、地

域研究を基盤とし、災害対応研究とアチェの紛争・現代史研究の二つの研究の流れを背景としている。

地域研究では、災害を日常生活から切り離された特殊な出来事であるとは捉えず、日常生活の延長上にあると捉える。[*23] 社会は潜在的にさまざまな課題を抱えており、日ごろはそれに目を向けずにやり過ごしていることが多いが、災害はそのような潜在的な課題があるところに大きな被害をもたらし、人々の目に明らかにする。したがって、もし災害への対応を、壊れたものを直し、失われたものの代用品を与えるだけで、災害が起こる前の状態に戻すだけにするとしたら、その社会が潜在的に抱えていた課題も元通りにしてしまうことになる。災害は多くの人命や財産を奪う不幸な出来事であるが、災害を契機に明らかになった社会の課題に取り組み、災害を契機によりよい社会を作ることが、次に災害が起こったときに被害を少なくすることにつながり、災害の犠牲を無駄にしないことにもなる。社会が抱える課題には大きいものも小さいものもあるが、武力紛争が続いていたアチェで津波後に和平合意が結ばれて紛争が終結したことは、被災を契機に社会の課題が解決された例の一つである。

災害対応研究には、地域研究から災害研究にアプローチするものと、防災研究から人文社会研究にアプローチするものがある。[*24] 地域研究から災害研究にアプローチしたものとして、災害を契機とする社会の変革に関して、清水展は、フィリピン・ピナトゥボ噴火により故郷を追われたアエタの人々が災害を契機に自らの先住民性を認識するようになった過程を描いた［清水 2003］。また、狭い意味での自然災害ではないが、植村泰夫は、世界恐慌がジャワの農村社会に与えた影響とそれへの対応を描くことで、ジャワ農村社会の特徴を明らかにしようとした［植村 1997］。遠藤環は、タイのバンコクにおける火事災害に対する住民の対応をもとに都市下層

*23 本シリーズ第一巻「はじめに」を参照。
*24 第一巻補論も参照。

図6　聖人シアクアラの墓所で礼拝する人（2005年2月、バンダアチェ市）

民の生存戦略について考察している[*25]［遠藤 2011］。いずれも、噴火や火事や経済危機といった突発的に生じた危機に対する地域社会の対応のなかに社会の特徴を見出そうとしている点や、災害を社会秩序の構築や再編の契機と捉える点に特徴がある。

人文社会科学の観点を踏まえつつ日本の災害対応を検討したものには、［矢守 2009, 2013］や［牧 2011］がある。[*26] 近年、災害対応分野における国際協力が進められるなかで、日本を含む先進諸国の防災実践とまったく異なる防災実践の様式を持った社会や文化の存在が指摘されるようになっている。これらの研究は、災害対応に文化や時代性が反映されることを念頭に置いている点に特徴がある。

本書は主に二〇〇四年の地震・津波からアチェが復興を遂げてきた過程を対象にしているが、アチェは長く紛争地だったため、地震・津波の復興過程においても和平交渉や紛争犠牲者の側面を切り離して考えることはできない。アチェの紛争・現代史研究では、アチェの現代史における位置づけを検討するうえで、ナショナリズム、イスラム、地域主義などによって理解することが試みられてきた。二〇世紀を通じてアチェで紛争や内戦が繰り返されてきたことをめぐっては、アントニー・リードのナショナリズムによる理解［Reid 1979］、ジェイムズ・シーゲルのイスラムによる理解［Siegel 1969］、ナザルディン・シャムスディンの地域主義による理解［Nazaruddin 1985］というように、現地史資料や現地調査を踏まえた豊富な研究蓄積がある。[*27] 日本でも、主として歴史学を中心にアチェについての

研究が蓄積されたきた。[*28] また、アチェ研究では、歴史・文化・政治を専門とする研究者が紛争対応や災害対応の実践の現場に積極的にかかわってきた。[*29]

---

*25 二〇〇四年のスマトラ島沖地震・津波の被災と復興に関する研究には、［林 2010］［木股ほか 2006］［佐伯 2005］がある。また、『地域研究』の第一一巻第二号ではスマトラ島沖地震・津波の特集が組まれている。［林 2010］は、文化人類学、防災研究、都市計画、建築学、地域研究などの各分野の専門家がインドネシア、スリランカ、インド、タイの現地調査を踏まえて行った共同研究の成果である。［佐伯 2005］は、一九九九年からインドネシアの人権活動家とともにアチェの人権侵害状況の改善のための活動を続けてきた著者が北アチェ県を中心に紛争被害者の声を丹念に拾い集めてまとめた報告で、津波被災から半年後に刊行された。［広瀬 2007］は、被災直後のバンダアチェで取材をした報道記者による著作で、津波に襲われて生き残った人々の証言を集め、同時に、被災直後のバンダアチェで人々が津波や被災をどのように語り、受け止めていたかが記録されている。

*26 矢守は「防災の〈時間〉論」と題した章のなかで、精神医学の知見を応用して、先進諸国はいわば中年期の社会であり、被災はこれまで蓄積してきたものの喪失と捉えられるために復興が「立て直し」と捉えられるのに対し、開発途上国は若年期の社会であり、復興は「新生」や「世直し」のプロセスとして取り組まれるとの考えを提示している［矢守 2009］。［牧 2011］は、災害を社会現象と捉え、世界各地の自然災害被災地における災害後の住まいのあり方について検討している。取り上げられた事例は、インドネシア・フローレス島地震津波災害（一九九二年）、パプアニューギニア・アイタペ津波災害（一九九八）、新潟県中越地震（二〇〇四年）、インド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）（二〇〇四年）、ハリケーン・カトリーナ災害（二〇〇五年）を中心に、フィリピン・ピナトゥボ火山噴火災害（一九九一年）、雲仙普賢岳噴火災害（一九九一年）、北海道南西沖地震（一九九三年）、阪神淡路大震災（一九九五年）、台湾・集集地震（一九九九年）、トルコ・マルマラ地震災害（一九九九年）、中国四川省汶川地震（二〇〇八年）、ソロモン諸島津波災害（二〇〇七年）と多岐にわたっている。これらの事例を踏まえて、被災後に被災前と同じ場所で住まいを再建するという考え方が日本の特定の時期に固有の考え方であり、世界の災害復興の経験を参照すれば、東日本大震災後の住宅再建にあたって、より柔軟な取り組みが可能であると指摘している。

*27 アチェ史研究は、アチェ戦争の長期化に苦慮したオランダにより派遣されたオランダ人イスラム研究者スヌック・フルフローニエが一八九一年から一八九二年に行った現地調査をもとにした民族誌『アチェ人』［Hurgronje 1906］を基礎として発展してきた。スヌック・フルフローニエの『アチェ人』については『世界史史料』第三巻（歴史学研究会編、岩波書店）の「アチェ戦争とイスラーム教」の項目も参照。

本書の構成

本書は、二〇〇四年一二月の被災直後から二〇一三年一二月までの九年間を扱う。この間のアチェは、大きく三つの時期に分けられる。被災直後の救援・緊急対応の時期、被災によって失われた住宅や社会インフラの回復・再建に取り組んだ復興再建期、そして被災と復興の経験を経て新しい社会秩序や意識があらわれた時期である。緊急時から災害対応が進む過程でどのような課題が見られ、それにどのように取り組んできたかを明らかにするため、三つの時期についてそれぞれ三つの章によって検討する。先に挙げた九つの問いは、三つの部の九つの章にそれぞれ対応している。

第一部では、内戦下にあったアチェが津波の最大の被災地となり、大規模な救援復興活動が展開する中で内戦状態が解消していった様子を見る。第1章では、アチェにとって津波被災がどのような意味を持っていたかを考える前提として、アチェが被災前にどのような地域で、どのような課題を抱えていたかを情報の観点から整理する。第2章では、支援者と被災者を結ぶネットワークの形成のされ方に注目して、内戦状態が解消した背景を考える。第3章では、行政が機能を失い、多様な人々が入り混じって救援復興が取り組まれるなかで、それぞれの現場でどのように「臨時」の社会秩序が形成されたか、またその特徴はなんであったかを検討する。

第二部では、さまざまな復興再建事業が進行する中で、被災者や支援者のあいだでの立場や考え方の違いがどのような形で表面化し、それを人々がどのように吸収し、受け止めたかを考える。第4章では、被災した人々の笑顔やユーモアを通じたやりとりの意味を考える。被災と復興は社会全体が共有する出来事であり、社会全体で取り組みがなされる。それと同時に、弔いや住宅再建は個別の営みでもある。社会全体の復興と個人の復興の間で生じるずれをアチェの人々がどのように調節し、受け止めようとしたかを弔い（第5章）と住宅再建（第6章）から考える。

第一部と第二部を通じて、世界の人々がアチェの復興にどのように関わり、それがアチェに何をもたらした

のか、また、災害からの復興過程と紛争からの復興過程という二重の復興過程が進む中でアチェの人々の意識がどのように変化していったのかについても考えたい。

第三部では、アチェの被災と復興の経験を経て、アチェや他のインドネシアの人々がどのような新しい価値観や認識を得るに至ったのかを考える。人類史上未曾有の被災に多様な立場の人々が協働により復興をなしとげた経験は、アチェや他のインドネシアの人々に新しい価値観や認識をもたらした。第7章では、被災を契機にアチェと他のインドネシアの人々の間にどのような関係が生まれつつあるのかを、第8章では、アチェの被災と復興の経験を共有し継承しようとする取り組みについて見る。また、そのことを踏まえて、第9章では、現在のアチェで何が課題となっており、どのような取り組みが考えられるかも考察してみたい。

第一部から第三部までの議論を通じて、アチェの被災者の顔に現れる笑顔の意味や背景を考えることによって、アチェが経験している復興とはどのようなものなのかを考えてみたい。未曾有の大災害を経験してもなおアチェの被災者たちが外国から来た客人たちに微笑みかけようとすることの意味を、民族性の違いや宗教心の強さといった異文化性によって捉えようとするのではなく、同じ時代に同じ地球に住む人間どうしであることを前提にして考えることは、アチェの文脈を離れて、この世に生を受けた私たちは結局のところ何のために生

*28 アチェ王国期については［鈴木 1976］［井東 1985］、オランダ植民地統治期については［利光 1995］［細川 2006］、日本軍占領期については［白石 1975］がある。港市国家としてのアチェ王国の特徴については［弘末 2004］が、スハルト体制期までのインドネシアにおけるアチェの位置づけについては［土屋 1988］がわかりやすい。

*29 アントニー・リードは、シンガポール大学アジア研究所（ARI）を拠点に、学術研究を通じたアチェの復興・再建に努めてきた。［Reid 2005, 2006］のようなアチェ研究に関する書籍の刊行のほか、アチェでの国際学術会議の組織や研究拠点設置を積極的に進めてきた。リードの活動は、［Feener *et al.* 2011］のように、歴史研究の進展と現在のアチェの復興とを結びつけて捉えている点に特徴がある。国連人道問題調整事務所のアチェ復興調整官を務めたエリック・モリスは、一九七〇年代後半にアチェで現地調査を行い、スハルト体制成立によるアチェ政治の変容について博士論文にまとめている［Morris 1983］。

まれてきて、生涯を通じて何を成し遂げてこの世を去るのかを考えることにも繋がるだろう。また、被災と復興を経てアチェにどのような新しい社会が生まれつつあるのかを考えることを通じて、アチェの経験が他の地域、とりわけ日本にどのような意味で適用可能かについて考える助けにもなるものと期待している。

アチェの地理と被害状況

本論に入る前に、アチェの地理と被害状況およびアチェの民族について整理しておきたい。

スマトラ島北端にあるアチェ州は、被災当時二一の県・市から構成されていた。アチェの中央部分をスマトラ島の脊梁山脈であるブキット・バリサン山脈が走り、これを境にアチェは地理的に大きく四つの部分にわけられている（図7）。

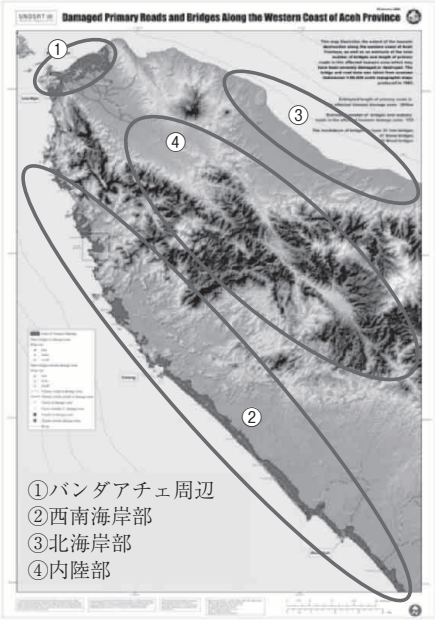

図7　アチェの地域区分と被害状況（①②の海岸部の濃いグレーの部分が津波で浸水した。UNOSAT Maps より）

⑴バンダアチェ周辺 ―― アチェ州の行政と経済の中心、被害と支援が集中

バンダアチェ市は、アチェの州都で行政の中心である。古くから外部世界への玄関口として機能し、海岸部に人口が密集している。バンダアチェを取り囲む形で大アチェ県が広がっているため、両者は行政上は異なるが、本書では大アチェ県の一部を含めて「バンダアチェ周辺」と呼んでいる。

平野部には水田が広がり、丘陵地では野菜や果実栽培が行われている。ジャワから移住してきたジャワ系住

民は野菜や果実栽培の主たる担い手として知られている。牛を始めとする家畜の飼育も行われている。

外部との主要交通経路は、①バンダアチェ市郊外にあるスルタン・イスカンダルムダ国際空港[*30]、②北スマトラ州メダンまで北海岸部沿いに延びる国道、③バンダアチェ市郊外のウレレー港ならびに郊外のマラハヤティ港[*31]、④西南海岸部を経由して北スマトラ州シディカランに通じる国道がある。

バンダアチェの公共交通機関は、ベチャと呼ばれる原動機つき輪タクと、ラビラビと言われる一四〜一五人乗りのミニバスである。中長距離は乗り合いタクシーと中大型バスが利用されている。

バンダアチェ周辺は、被災の状況から、①津波によって壊滅した地区、②建物が一部倒壊し、津波によって運ばれた瓦礫やゴミ、泥が押し寄せた地区、③津波による直接被害を免れた地区、の三つに分けられる。海岸部（エビ・魚の養殖池、住宅地など）から町の中心部（官庁街、商業地区、文教地区）までの部分が直接の被害を受け、人的被害はアチェ内で最大であり、行政機能も大きなダメージを受けた。

これに対し、バンダアチェの一部と大アチェ県の内陸部には、空港を含め、津波の被害を直接受けなかった地域が広がっている。この地域が人々の避難先となり、また、救援活動の拠点となった。

外国の軍やNGO・個人、インドネシア国内の諸組織など外部社会の団体・個人の多くはバンダアチェに拠点を置き、相互に連携しながら集中的かつ体系的な救援・復興活動を行った。

---

*30 イスカンダルムダ空港は、一九九七年のアジア金融・経済危機以前はマレーシアのペナン経由でクアラルンプール行きの便が週三便運行していた。その後、国際線はなくなり、北スマトラ州メダンへガルーダ・インドネシア航空が週一〇便運行するだけとなっていたが、津波後にマレーシアへの直行便が飛ぶようになった。

*31 マラハヤティ港は、北スマトラ州メダンの玄関港であるブラワン港との間に定期便が毎日一便運航されている。なお、マラハヤティ港はバンダアチェ市から車で三〇分とやや遠隔であることから、オランダ植民地期に開発されて現在は漁港として利用されているバンダアチェ市近郊のウレレー港の再開発事業が進められている。

(2)西南海岸部 ― 沿岸部に広範で甚大な被害、支援経路の確保が重要

この地域は震源に最も近く、長距離にわたって沿岸部が被害を受けた。住民と行政・商業施設がほとんど沿岸部に集中し、また、西南海岸部とその他の地区を結ぶ主要な陸路はいずれも沿岸部にあり、道路・橋ともに津波によって大きな被害を受けた。このため、被害状況の把握や救援物資の輸送・分配などに障害が生じた。バンダアチェ周辺から南側の海岸沿いに南東に下っていくと、順に、アチェジャヤ県、西アチェ県、ナガンラヤ県、西南アチェ県、南アチェ県、アチェシンキル県の六県がある。また、南アチェ県沿岸にはシムル島（行政上はシムル県）がある。

この地域は、アチェ全体から見ると人口過疎地帯で、主な産業は米作、アブラヤシ栽培、木材伐採である。バンダアチェから西南海岸を通って北スマトラ州シディカランに通じる道路は基本的に海岸沿いにある。多くの河があり、橋が整備されたのはこの一五年ほどのことである。各県にはインド洋に面して港がある。[*32]

ムラボには空港があり、メダンからシナバンとムラボを経由してバンダアチェの北に位置するウェー島の街サバン市に至る便はサバン・メラウケ・アチェ・カーゴ（SMAC）によって週二便運航されている。

北海岸部に至る道として、ムラボ（西アチェ県）から内陸部を経てシグリ（ピディ県（当時））に抜ける道がある。道路状況はあまりよくないが、津波後にバンダアチェからムラボへの代替路として整備された。

(3)北海岸部 ― 被害は比較的軽微、紛争からの復興の要の土地

バンダアチェ周辺から北海岸部を東に行くと、順に、ピディ県、ビルン県、北アチェ県、ロクスマウェ市、東アチェ県、ランサ市、アチェタミアン県の五県二市がある。

海岸部からブキット・バリサン山脈までの平野部は水田や農園（アブラヤシ、ココヤシ、カカオなど）に利用されている。また、沿岸部ではエビの養殖などが行われている。ロクスマウェ市周辺のアルン地区には天然ガス田があり、天然ガスの精製工場と関連産業が発達している。

アチェと域外を結ぶ陸上交通の要衝で、バンダアチェと北スマトラ州メダンを結ぶ幹線道路が北海岸を通り、さらにビルン（ビルン県）からは内陸部を経て西南海岸に至る陸路が通っている[*33]（図8）。

ロクスマウェ市周辺にはマリク・サレー空港とモービル・オイルの空港の二つがある。また、液化天然ガスの輸出に使われる港としてアルン精製基地内にあるランチョン特別港がある。

シグリ（ピディ県）とビルン（ビルン県）からは内陸部へ通じる道が分岐している。特に、ビルンはコーヒーや木材などの森林生産物を内陸部のガヨルス県から運び出す際の経由地として発展した町である。

この地域では、歴史的にアチェにおける政治変動の契機が発生してきた。アチェ戦争、インドネシア独立戦争、ダルル・イスラム運動、自由アチェ運動などである。アチェの行政の中心であるバンダアチェで社会変化が生じ、その影響が北海岸に及んで社会矛盾が大きくなると、バンダアチェを変えることで問題解決を求める動きが生まれる。この動きが北アチェからバンダアチェに波及し、時にアチェ全域に大きな変化をもたらすことで、アチェ全域を巻きこむ政治変動に発展してきた。

被災地の多くは漁村で、地震・津波の被害はバンダアチェ周辺や西南海岸に比べると軽微だった。西南海岸など域外からの避難民が多く集まったが、地震・津波による被害が軽微であると評価された結果、被災当初は、被災前からこの地域で活動を行っていた一部のＮＧＯを除いてこの地域を対象にした支援事業が行われなかった。その一方で、バンダアチェへの支援物資はメダンからこの地域を走る幹線道路を経由して輸送された。

---

*32 チャラン（アチェジャヤ県）、ムラボ（西アチェ県）、タパクトゥアン（南アチェ県）、スソ（南アチェ県）、シナバン（シムル県）、シンキル（アチェシンキル県）。

*33 バンダアチェからメダンへの国道沿いには古い鉄道線路の跡を見ることができる。オランダ植民地時代に整備されたもので、一九五〇年代まで使用されていた。

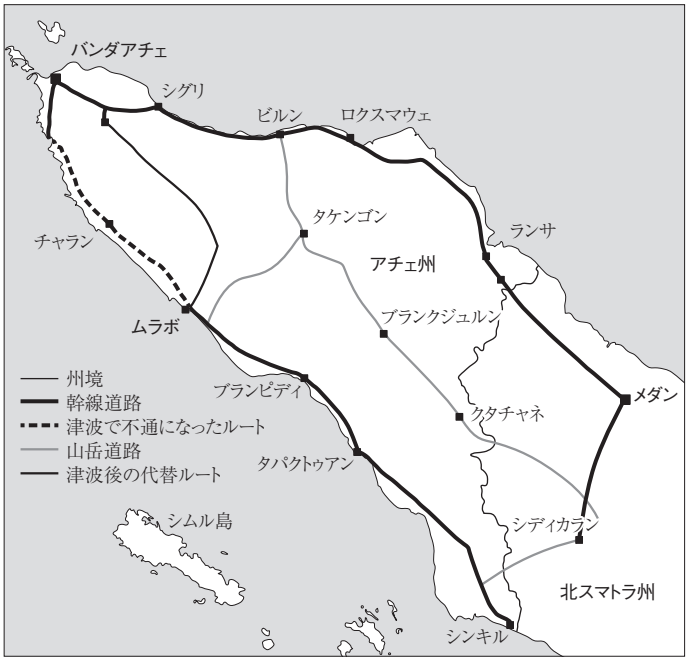

図8　津波前と津波後のアチェの交通ルート図

(4)内陸部――津波被害はなし、避難民が通過

ブキット・バリサン山脈のふもとにあたるベネルムリア県（旧中アチェ県の一部）、ブキット・バリサン山脈に囲まれたラウット・タワル湖畔のタケンゴンを中心とする中アチェ県、その南東に位置するガヨルス県、アラス渓谷沿いに発展した東南アチェ県の四県がある。

コーヒーや果樹の栽培が主な産業である。ガヨルス県と東南アチェ県の一部はグヌン・ルサ国立公園となっており、熱帯森林資源の保護が進められているが、不法伐採が相次いでいるとの報告がある。

主な陸路はビルンからタケンゴン（中アチェ県）、ブランクジュルン（ガヨルス県）、クタチャネ（東南アチェ県）を経由して北スマトラ州のシディカランへ抜けるルートである。海岸部との交通の便が限られていることが内陸部の開発を阻害してきたとの認識から、近年、ラディア・ガラスカ（インド洋 Lautan Hindia、ガヨ地区 Gayo、アラス地区 Alas、マラッカ海峡 Selat Malaka の四つの地名の部分をつなげて命名）ルートを開発する計画が持ち上がった。[*34]

アチェ州全体と以上の四つの地域および県・市別の被災者数は表1のとおりである。

アチェの民族構成

一般に「アチェ人」と呼ばれるアチェの住民は、民族別に見るとおおまかに次のように分けることができる。[*35]

①アチェ系　（州人口の五〇・三％（以下同じ）。主にバンダアチェ周辺、北海岸、西南海岸北部などの沿岸部に住む）
②ジャワ系　（一五・九％、州内各地に住む）
③ガヨ系　（一一・五％、主に内陸部に住む）
④シムル系　（二・五％、西南海岸部のシムル島に住む）
⑤華人系　（都市部）

アチェには古く中東やインドから移住してきた人々もいるが、その多くは現在では「アチェ系」の中に含まれており、人口統計的にも文化的にもその独自性はほとんど失われている。

これらの他に、ミナンカバウ系（西南海岸南部）、バタック系（内陸部）、マレー系（北海岸部東部）の人々が古くから居住していた。この三つの民族はそれぞれ故地を持つ（ミナンカバウ系は西スマトラ州、バタック系は北スマトラ州、マレー系は北スマトラ州やリアウ州）ことから、「アチェ人」には含まれないと考える人もいる。

これらの人々は、民族ごとにそれぞれ異なる言語を話す。しかし、古くから東西交通の要衝として栄えてきたこの地域では、現在のマレーシア・インドネシアを含む地域で広く交易言語として使われてきたマレー語が

*34 このルートが国立公園内を通ることが問題視され、実施には至っていない。
*35 二〇〇〇年に実施されたインドネシア国勢調査の結果による。

表１　2004年スマトラ島沖地震・津波によるアチェの県・市別の被災者数

県・市名	面積（平方 km）	人口＊1（人）	死亡＊2（人）	行方不明＊2（人）	避難民＊3（人）
バンダアチェ周辺	2,866	544,284	90,829	30,678	144,848
大アチェ県	2,686	295,957	38,531	15,176	98,384
バンダアチェ市	61	223,829	52,273	15,394	40,831
サバン市	119	24,498	25	108	5,633
西南海岸	20,992	925,709	30,383	4,944	139,634
アチェジャヤ県	3,703	98,796	16,797	77	31,564
西アチェ県	2,426	195,000	10,874	2,911	49,310
ナガンラヤ県	3,903	143,985	1,077	865	11,281
西南アチェ県	1,685	115,358	3	0	13,847
南アチェ県	3,646	197,719	1,566	1,086	16,049
アチェシンキル県	3,577	124,758	22	4	2,032
シムル県	2,052	50,093	44	1	15,551
北海岸	17,783	2,249,816	6,686	1,164	108,295
ピディ県	4,161	517,697	4,401	877	32,067
ビルン県	1,901	361,528	461	58	14,043
北アチェ県	3,297	523,717	1,583	218	28,113
ロクスマウェ市	181	167,362	189	11	16,412
東アチェ県	6,041	331,636	52	0	14,054
ランサ市	262	122,865	0	0	2,806
アチェタミアン県	1,940	225,011	0	0	800
内陸部	15,724	489,677	225	227	8,124
ベネルムリア県＊4	-	-	2	0	1,204
中アチェ県	5,773	272,453	192	277	5,161
ガヨルス県	5,720	66,448	0	0	0
東南アチェ県	4,231	150,776	31	0	1,759
アチェ州全体	57,365	4,209,486	128,123	37,063	400,901

＊１　2003年、アチェ州統計局調べ。
＊２　2005年５月２日、国連統計。一部に2005年３月28日のニアス島沖地震の被災者を含む。
＊３　2005年２月24日、インドネシア政府災害対策局発表。
＊４　中アチェ県から分立して成立したばかりの県であるためデータが得られない。

普及している。そのため、アチェではマレー語（インドネシアではインドネシア語と呼ばれる）を話す人の比率が住民の七〇％を超えている。これは、ジャワ島でのインドネシア語の普及率よりも高いと言われている。

アチェの人口のうちイスラム教徒は九八・一一％、キリスト教徒（プロテスタント）は一・三二％、キリスト教徒（カトリック）は〇・一六％、ヒンドゥ教徒は〇・〇二％、仏教徒は〇・三七％である。[*36]

なお、本書では民族を単位として人々を捉える立場をとらない。これは、災害対応において人々の対応は本質的にかわらず、もし異なって見えるとするならば、時代状況や歴史的背景、地域性によって災害対応の現れ方が異なるためであるとの考えのためである。民族や地域にもとづいて、人々を集団的に把握し、人々の行動をその集団性に規定されたものとして理解を試みることはしない。したがって「アチェの人々」という言い方をする際には、その多くはイスラム教徒でアチェ語を話すアチェ系の人々であるが、民族的・文化的に一体となった集団性を想定せず、アチェで津波被災を直接的・間接的に経験し、それへの対応を迫られた人々のことを想定している。

図9　アチェの人々の穏やかな表情（2005年8月）

*36 [Leo 2003]